

江戸幕府記念会会報

NO. 22

1986・1・30

暇をけし

時分の時とうつおと

きうとあふ

あせ力をき

(同上)

河上肇没後四十年特集



京大を追われた頃（昭和3年）

目次

河上肇文献の四十年……………	杉原 四郎	12
河上肇と王守梧……………	一海 知義	(7)
河上肇と佐々木惣一……………	松尾 尊光	110
河上肇記念会……………		
山口慰話会設立について……………	細迫 朝夫	24
編集後記……………		12

河上肇文献の四十年

杉 原 四 郎

は し が き

河上肇が一九四六年一月に逝去してから四十年の歳月がたった。その間に刊行された河上肇に関する文献はおびただしい数にのぼる。本稿ではそれらの中から目ばしものをひろい出し、リストアップすることを通じて、四十年間に現れた諸文献を回顧したいと思う。

まず第一に、河上肇を主題とする雑誌もしくは雑誌の特集号が出ている。それらの中から五種を紹介しよう。第二に、河上肇の業績を精選して一二巻にまとめあげた『著作集』、彼の個人雑誌『社会問題研究』の複製、それから全三六巻の『全集』が刊行された。この三大出版についてのべよう。最後に第三に、四〇年間に公刊された河上肇についての研究書のうちから代表的なものの十点をえらび出し、現時点における河上研究の状況を知ることができたいと思う。

一 河上肇ゆかりの雑誌五点

(一)『夜あけ』、河上全編集、第一集、一九四九年一月。

河上会の機関誌。河上会は一九四七年二月に第一回結成準備会が持たれたが、河上歿後二年目の一九四八年一月三〇日京都百万遍進々堂で結成総会があり、その後遺品展示会や記念講演会を開いた。京都の本部の他、東京、大阪、金沢に支部がおかれた。本号には河上秀子談「主人の思い出」の他、堀江国一、小林輝次、名和統一らの門下生が執筆している。年二回発行される筈であったが、第一集だけに終り、河上会も長くは続かなかったようである。京都では、その後石川興二を中心とする河上肇会（事務所京大経済学部）が作られ、毎年河上の命日に総会を開いていた。

(二)『東京河上会会報』、同事務局発行、第一号、一九六一年一〇月。

歿後十五年にあたる一九六一年の一月二〇日（河上の誕生日）に発足した東京河上会（代表小林輝次）の機関誌。本号には学士会館で開かれた創立総会の模様がよくわしく報告されている。その後本誌には例会での報告の他会員の河上肇研究が掲載されるようになり、現在に至っている。なお本会報の第四二号までの内容を分析したものに天野敬太郎「東京河上学会会報」総覧（田中文蔵『河上肇研究の一側面』、私家版、一九七八年所収）がある。

④『経済論壇』、京都大学経済学会、第一一〇巻第三、四合併号、一九七二年九月・一〇月。

本誌は創刊（一九一五年七月）以来河上が京大在職中たえず執筆した雑誌。本号には一九七二年六月に京大経済学会が河上肇記念会と共催した河上肇の遺品展および記念講演会の記事（大野英二）と、講演会での講演二つ（山之内靖と杉原四郎）がのっている。京都府立総合資料館で開催された遺品展は、河上の著作、書画、愛用品約一七〇点をあつめ、盛会であった。河上肇記念会・京都府立総合資料館共編『河上肇遺品展図録』（一九七三年）が出ている。なお本誌は第一二四巻第五・六号（一九七九年一一・十二月）を河上肇生誕一〇〇年記念号として刊行している。

して刊行している。

④『河上肇記念会会報』、第一号、一九七五年十二月。

前記の記念行事を契機につくられた河上肇記念会が一九七三年一月一八日法然院での総会で正式に発足した。本誌はその機関誌である。創刊号には代表末川博の「会報の創刊に当って」、小泉仁一郎・大門英太郎「河上肇記念会由来」などがのっている。こうして現在河上肇の会は東京と大阪とにあるが、昨年一月山口でもスタートしたことは、別に紹介されている通りである。

⑤『思想』、岩波書店、第六六四号、一九七九年一〇月。

河上肇生誕一〇〇年の特集号、石田雄、西川長夫、一海知義、バーンスタインの四論文をおさめる他、大島清「思想の言葉」も河上に關説している。バーンスタインは後掲の河上研究書の著者である。この時点ですでに全集が岩波書店から出ることが決まっていた。なお一九七九年にはかずかずの記念行事が行われたが、その主なものについては住谷一彦編『求道の人・河上肇』（新評論一九八〇年）のあとがき参照。

二 河上肇の著作に関する三大出版

①『河上肇著作集』、全一二巻、筑摩書房、一九六四―六五年。

監修大内兵衛、大塚金之助、小島祐馬、佐々木惣一、末川博、恒藤義、野坂参三、編集は関西が堀井孝治、住

谷悦治、天野敬太郎、寿岳文章、菅原昌人、末川博、関東が小林輝次、堀江邑一、宮川夷、長谷部文雄、白石凡

内田丈夫であるが、主として白石が内田の協力をえてあ

たった。本集の編集を期して著作集刊行記念会が作られ

た。この記念会と東京河上会とが合同で一九六五年六月

著作集完結記念集會が開かれ、その次が東京河上会会

報第九号にのっている。そこで白石が編集経過を報告し

ているが、最初十五巻の予定が筑摩書房の希望で十二巻

に圧縮したため、編集に苦心したが、『将来全集を出す

基礎となるように』心がけたとのべている。本著作集は

郭沫若はじめ中国の多くの人々にも歓迎された。

「『社会問題研究』の複刻、全一二巻、別巻一冊、社会

思想社、一九七四―七六年。

『社会問題研究』（一九一九―一九三〇年）全一〇六

冊の全巻複刻で、編集にあたった刊行委員会のメンバー

は、末川博（代表）、住谷悦治、堀江邑一、堀井孝治、

信一、出口勇蔵、天野敬太郎、内田丈夫が書き、天野編

の総索引がつけられている。

『河上肇全集、第一期二八巻、第二期八巻、岩波書店、

一九八二―八六年。

監修末川博、顧問寿岳文章、天野敬太郎、編集杉原四

郎、大野英二、住谷一彦、平井俊彦、一海知義、松尾尊

光、山之内靖、編集協力内藤昭子。没後四〇年の年に完

結したこの全集が筑摩書房から岩波に引きつがれた経緯

については、本誌でたびたび報告したので再説を省く。

『図書』（岩波書店一九八三年三月号）にのった座談会

「河上肇の魅力」（内田義彦・杉原四郎・山之内靖）を

献の目録で、その後の河上研究や彼の著作集編集上の基礎資料となった。その後天野自身による補訂が何度か出ている。

〔三〕住谷悦治『河上肇』、吉川弘文館、一九六二年。

人物叢書の一冊で、河上肇の最初の伝記。メンタル・ヒストリーを中心としたもので、「二二―四頁の『河上肇思想的発展（京都大学赴任まで）』という図や第六河上博士の人生哲学」にその特色がうかがえよう。

〔四〕末川博編『河上肇研究』、筑摩書房、一九六五年。

諸家の河上肇論二一篇を収録。そのうち柳利彦、島崎藤村らの五篇は戦前のもの。佐々木惣一、小島祐馬、作田庄一ら友人の回想、河上敬太郎、桑原武夫、三好達治ら文学者による河上論の他、大熊信行のユニークな河上論や、私が近五十周年に寄せて書いた『河上肇博士の労働観』などをふくむ。

〔五〕大内兵衛『河上肇』、筑摩書房、一九六六年。

「三篇の河上論をおさめる。いずれも、『だんだんと批判に傾いてはいるが、それでもよくこの一人を語ってあきない』文章だが、とりわけそのうちの河上肇と藤田民成をあわせ論じた二篇は力がこもっている。

〔六〕住谷一彦『河上肇の思想』、未來社、一九七六年。

『特殊・日本『近代』市民社会思想形成史研究』という副題をもつ。『河上肇の人間像と思想像の裡に伏在する今日の視角からみて重要な論点を可能な限り掘り起こす』ために書かれた。河上肇と柳田國男との対比が考察の主軸をなしている。住谷『日本の意識』（岩波書店、一九八二年）をも参照。

〔七〕Schneider, R., Kawakami Hajime (1879 - 1946), Der Weg eines japanischen Wirtschaftswissenschaftlers zum Marxismus, Hamburg 1976.

一七五頁（内本文八四頁）で、ハンブルク大学の論文、一・二章で明治・大正の日本の社会史を、三章から八章までで河上の伝記と『社会主義評論』から『貧乏物語』をへて『資本論入門』にいたる諸著作をとりあげて論評している。

〔八〕Bernstein, G. L., Japanese Marxist, a Portrait of Kawakami Hajime, 1879-1946, Cambridge, 1976.

二二二頁（内本文一七三頁）で、ハーバード大学の学位論文。(1)「明治のナショナリスト」、(2)「アカデミクなマルクス主義者」、(3)「共産主義的革命家」の三部構成で、時代的背景と関連させながら河上の一生をたど

っている。前掲「思想」に寄せた彼女の論文も参照。
内「海知義『河上肇詩註』」、岩波書店、一九七七年。

河上肇は晩年漢詩の研究と実作に熱中したが、本書は河上の作った漢詩のほとんどすべて（一つを除きすべて六十才以後の作）を註釈したもの。著書は陸放翁の研究を通じて漢詩人河上肇に出会えたことを感謝しているが、本書によって一般の読者に河上独特の漢詩の世界が解放された。同じ著者による「河上肇と中国の詩人たち」（一九七九年）や「河上肇そして中国」（一九八二年）をも参照。

内西川勉編「アルバム評伝河上肇」、新評論、一九八〇年。

生誕百年にあたる一九七九年にNHKはテレビ評伝河上肇を放送したが、それを作ったディレクターの手で編まれたのが本書で、全編にもられた豊富な写真が大きな魅力である。編者の姿勢は「河上肇私論―河上と民衆―」によく出ている。

田垣田庄兵衛編「河上肇「貧乏物語」の世界」、法律文化社、一九八三年。

一九八〇年京都で生れた「河上肇研究会」での講話八篇をおさめ、巻末に京都にある二つの河上文庫（京大経

済学部と府立総合資料館、共に冊子目録あり）の紹介を附す。「河上肇「自叙伝」の世界」（一九八四年）はその続編。一九四七年にはじまった京大の河上肇（毎年パンフレットを出していた）がここ数年途絶えているのは残念だが、この研究会は熱心な市民にささえられて、河上終焉の地でいまもつづいている。



河上肇と王守椿

一 海 知 義

大正の末から昭和の初にかけて、京大経済学部の上河上肇に、王守椿という名の中国人留学生がいた。

昭和二年（一九二七）五月京大経済学研究室編の『大学院生名簿（退学者）』は、この人物についてつぎのように記録する。

王守椿 明治三十年（一八九七）五月五日生。本籍地、江蘇省銅山縣。現住所、浄土寺西田町大文字第二宿舍。学部卒業、大正十四年（一九二五）三月。同年五月九日大学院入学許可。研究科目、経済原論。指導教授、田島教授、河上教授。

この名簿が発行されてから五十八年後、一九八五年三月二十三日付の中国共産党機関紙『人民日報』は、『中国共産党のすぐれた党員、傑出した教育者、著名な経済学者王学文同志』の告別式が、同日午後、北京八宝山の革命公墓礼堂で舉行される、と報じた。この日の『人民

日報』は、王学文氏が江蘇省の出身であり、若いころ日本に留学してマルクス主義経済学を研究した、と簡略に述べていたが、実は王守椿と王学文、この両氏は、同一人物である。

日中戦争期、野坂参三氏の延安での反戦活動を援助した人物として、王学文の名は私も以前から知っていた。そして王氏が河上肇博士の門下生であることも、いくつかの資料によって知っていた。そこで逆算して年代に見当をつけ、京大所蔵の資料にあたってみたが、王学文の名は見あたらない。該当しそうなのは、名はちがうが同姓の「王守椿」だけである。

「守椿」が忌名（いみな・本名）で「学文」が字（あざな・呼び名）なのだろうか。だとすれば、両者の間に意味のうえでの関連があるはずである。たとえば毛沢東の字（あざな）は潤之だそうだが、潤・沢の二字が一つ

の熟語をなす、というのはその一例であろう。ところが「守椿」と「学文」の間には、あまり関連がありそうにない。「椿」は、「莊子」逍遙遊篇に見える「八千歳ヲ以テ春トナシ、八千歳ヲ以テ秋トナス」という不老長寿の霊木で、「守椿」椿を守る」とは、おそらくは息子の長命を願うての親の命名なのだろう。一方「学文」の方は、たぶん『論語』学而篇のつぎのことばにもとづく。「行ヒテ余力アラバ、則チ以テ文ヲ学ベ」。——守椿と学文、関連はなさそうである。

「学文」は字（あざな）でなくて雅号か筆名（ペンネーム）なのだろうか。とすれば、本名との間に関連性がないのがむしろふつうである。名称についての私の推理はいまなお未解決のままなのだが、両王氏が同一人物であることは、ほかならぬ王学文氏自身が中国で発行されている日本語雑誌『人民中国』（一九八一年十月号）に一文を寄せたことによって、明らかにになった。その一文は「河上肇先生に師事して」と題するが、はじめに付された編集部の「筆者紹介」に、「王学文、原名王守椿」をしるされていたのである。学文が字なのか号なのか、あるいは筆名なのか、これだけでは相変らずわからぬが守椿が「原名」とあるから、これはやはり忌名（親がつ

けた本名）なのだろう。

王氏は親の願いがこめられた命名通り九十歳（京大「大学院生名簿」の記載は誤りで、一八九五年生）の長寿を保って世を去った。その晩年、老齢にもかかわらず、河上肇の祖国日本のことを常に心にかけていたようである。私のごときものが書いた小文にさえ目を通し、「王学文『資本論』研究文集」（一九八二年中国社会科学出版社）といった著作を送っていただいたこともある。

王氏は一九二七年に日本留学を終えて上海へ帰ったのちも、「日本の共産主義者と連絡をとり、日本の運動の上にも少なからぬ功勞」があったといわれる（『野坂参三選集戦時篇』、一九六四年日本共産党中央委員会出版部）。そうした側面について、かつて私もいくつかの資料を紹介したことがあるが（『河上肇そして中国』一九一一九六頁、一九八二年岩波書店）、何分にも門外のことであり、本格的な研究は今後の若い世代に期待したい。中国における王学文研究は最近ようやく進みはじめたようだが（たとえば雑誌『経済研究』一九八五年第十期の特集参照、同年十月二十日刊）、日本の側からの専家による研究が——「河上肇と王守椿」というテーマをもふくめて——はやく始められるよう望みたい。それは、

王氏生前の活動へのはなむけとなるだけでなく、日中友好の一つの礎石となるだろう。



王学文氏（写真、『人民中国』より）

編集後記

戦後、最初の京都の冬は例年になく寒かったことを思う。四〇年が過ぎ、当時少年の編集子も五十歳を越え、例年になく寒い一月を迎えた。

杉原先生には河上没後四〇年によせてを、一海先生には昨年三月亡くなられた王学文氏への追悼をお願いし、ご投稿をえました。昨年の総会における松尾先生のご講演を加えさせていただき、本誌は河上肇没後四十周年記念号として皆さんにお送りすることにいたしました。

さらに昨年発足しました「山口河上会」（略称）のご報告をえ、本記念号に加えることができましたこと会員の皆さんとともに喜びたいと思います。

今春には記念行事として講演会の開催などが世話人会において準備されています。本誌次号にはその案内と昨年の総会記録を入れて会員通信特集を組み、四月にはおとけしたいと思っています。乞ご期待。乞声援。

（細川 記）

河上肇と佐々木惣一

松 尾 尊 兌

これからお話をいただきます京都大学文学部の松尾尊兌教授をご紹介します。

松尾さんは日本史、特に明治以降の日本の現代史のご専攻でございます。河上肇全集は今七人の編集委員でこ



さいますが、その中のお一人として、河上肇の昭和三、四年から地下生活に入りますころの、つまり政治運動をやっておったころを松尾さんに編集をいただきました。

河上だけではなくて、その当時の日本の政治史あるいは思想史にご造詣の深い松尾さんに、河上と非常に親しかった佐々木惣一の関係について、これからお話を伺いますので、どうぞよろしくお願いいたします。(一九八五年総会の講演、杉原四郎世話人代表の紹介)

私は、河上先生にはお目にかかったことはございません。当年とって五十五歳。もう十日もしますと五十六ということになります。ここにお出での方々の中では若い方から数えた方が早いということでございます。

佐々木惣一先生は、私が生まれました鳥取の大先

輩でございまして、中学校、それから高等学校は違いますが、それでも、もちろん大学は京都大学の後輩に当たります。そういうことで、佐々木先生には二度下鴨のお宅でいろいろお話を伺ったことがございます。

きょうここに持ってきてまいりましたが、これが佐々木先生の書でございますね。「存心養性以事天」陳放翁の一句です。私は余り骨董趣味はございませんのですけれども、もう十年ぐらい前になりますか、大阪の阪急でこういうものの即売会をやっております、もちろん私のところには目録は来ませんですけど、私の近所に北山茂夫という、私が非常にお世話になった先生がおられまして、この方が、「松尾君、佐々木先生の字が出てるよ。君は買わねばならん」とおっしゃいました。ほかならぬ北山さんがそういうことを言われるのであれば、仕方がないと思って、当時の金で大枚九万円を持って大阪まで出かけて手に入れたのがこの書でございます。ちゃんと自筆の題書きもございまして、まさしくこれは佐々木先生の書であることは疑いもございません。（写真参照）

私は先ほど申しましたように、河上先生にはお目にかかったことはないんですけれども、高等学校時代から、

河上先生のお書きになったものを『経済学大綱』とか、特に『自叙伝』については繰り返し読んで覚えがございまして、文字どおり傾倒したという思い出を持っております。京大に入りますと、河上祭——京都に出てきたのが一九五〇年（昭和二十五年）でございますから、既に始まっており、河上まんじゅうが売り出されたのも覚えてます——には必ず出席しました。そういう次第で、河上先生には随分深入りした覚えがございます。

卒業いたしましたして、第一次大戦あたりからの歴史を主にやっていて、京都地方労働運動史という大きな本の編纂もお手伝いすると、そこへ当然河上先生が出てこられた。日本の労働組合の元祖ともいうべき友愛会が京都でつくられたときも河上さんが非常に尽力されたということなども知り、それが恐らく河上さんの一つの大きな転機になったということも推測のつくようになりました。今でもあると思いますが、京大の経済の図書館の中には友愛会の機関誌「労働及び産業」、あるいは友愛会の神戸連合会が出していました。「労働者新聞」のバックナンバーが幾らか残っております。これは河上さんが残しておかれたものですが、そういうものも借り出して勉強していたのでございます。

ところが、調べていきますうちに、河上さんに対する熱意がだんだん薄れてくるわけなんです。どういふことかと申しますと、先ほどどなたか、「河上先生は正直な方だ、ときには思い間違ひもあるけれども」と、適切におっしゃいましたが、私には、その河上さんの思い違ひが気になるようになったのです。

その最たるものは、労農派に対する偏見です。私は自分で言うのもおこがましいんですけども、血筋では講座派の正派と想っているんです。私は外国に行っても、自分の学園の上でのしいさんは羽仁五郎であると言います。羽仁さんには何遇もお目にかかり、また選挙があると引っ張り出されてお手伝いをやらされたぐらいですから、自分では講座派の人間だと思っております。労農派の重鎮で向坂逸郎という方がおられます。ことしの一月にお亡くなりになったわけですが、向坂さんのところには随分いろんな資料がごございます。ドイツだけではなくて、日本についても、例えば堺利彦の残したものなどはすべて向坂さんところに行っている。日本社会主義同盟という歴史的な組織ができたときの名簿なども向坂さんのうちにある。

ついでに申しますと、向坂さんの蔵書が大原社会問題

研究所に入ることになりました。それは大変結構なんです。ただ残念なことに、大原社会問題研究所自体が八王子の山の奥に引っ込んでしまったんですね。大変不便な路であって、これまでは飯田橋のあたりで大変便利のところにあつたんですが、そんな山奥に引っ込まれたんじゃ、こっちが乏しい財布をはたいて東京に出て、一日か二日余分に東京におらねばならんというようになって、はなはだけしからんと思っているんですけども、とにかくそういう不便なところに向坂さんの本が入るんだということだけご報告しておきます。

私は向坂さんのところに資料を見せてもらいによく出かけたわけですが、向坂さんは私が一体何者であるかということはよくご存じなんです。労農派では決してない。つまり講座派の人間だ。と申しますのは、私を紹介してくれたのが、山辺健太郎という、その昔日本共産党の統制委員で、敗戦のとき府中刑務所から徳田球一なんかと一緒に出てきた方なんです。山辺さんはなかなかの学者ですから、「松隈君、一遍向坂さんとかへ行ってみる」と紹介状を書いて下さった。向坂さんに会ってみるとこれがまた実にいい人なんです。

僕は何回か向坂さんの家に泊めてもらいました。そう

いう一宿一飯の仁義ということじゃないんですけど、労働派は河上先生が酷評されるようなものではありません。ともかくあゝいうマルクス主義もあるのです。端的に言えば、コミンテルンの指示に従わなかったマルキストです。今日日本共産党は自主独立ということをおっしゃるわけですが、その先驅をなすものとしての意義は十分あるだろうと思うんです。しかし、労働派に対する河上さんの評価は、ご承知のように、非常に低い。そういうところで、昔のように河上一辺倒というふうにはまいらなくなっただけです。

もう十年ぐらい前ですか、そのころは末川先生も佐谷先生もお元気で、この集まりでこの場所に座っておられたのをまだよく覚えてますけれども、杉原先生から呼び出しを受けて、何のお話かと思ったら、河上全集を手伝えとのことでした。私はしきりに辞退したんですが、ともかくだれか歴史関係の人がいないと困るから出るということ、余儀なくお付き合いいたして、お荷物になりました。河上全集のご指導によって今日までに至った次第です。ですから、杉原先生、それから一海さん、一海さんは私と京都大学の同期生でございますけれども、このお二人のように最後まで河上全集の仕上

げに協力したというのではなくて、先ほど杉原先生がおっしゃったような、ごくわずかの間だけ、昭和の初めから先生が牢屋に入られるまでの担当をさせていただいたというのが実情でございます。

私は最近、といっても二年ぐらい前から佐々木先生のことを気になりまして、調べています。それと申しますのも、滝川事件の五十周年が一昨年になるわけですね。ところが、奇妙なことに滝川事件が起った京都大学では記念事業が全くなかった。立命館大学では土曜講座で連続四回の講演をなさり、それから京都新聞ホールで記念講演会を催された。滝川事件の関係者が集まっていた記念会が京都で開かれても、京都では行われない。そういう不思議な現象がありました。それで、佐々木先生の後輩である私とすれば、こういう不面目なことはどうも忍びがたい。京都大学の法学部ではいろいろ複雑な事情があつて、記念会的なことはおやりになれないようなんです。私は幸い文学部という別なところにおりますから、その点自由でありますし、佐々木先生の後輩というのでどこに向かっても自分は滝川事件のことをやる権利があるんだと大きな声で言えます。そういうことで滝川事件のことを調べ始めた次第でございます。

佐々木先生の資料をいろいろ調べたしますと、佐々木先生と河上先生とは非常に仲のいいお友達だったということ、自叙伝にも出てくるので知っていましたけれども、やはり直接に河上さんからの佐々木さんあての手紙等々を見ますと、改めてこの二人の關係が思い起こされ去年の十月の『世界』に「河上肇と佐々木惣一」という短い文章を書きました。そのことで、私の河上先生に対する考えがまた少し変わってきつあることを自分でも自覚しています。

きょうは、杉原先生から何かしゃべろというお話で、何でもいいのか、一度發表したものでいいのかと申しますと、それでも結構だということで、一応「河上肇と佐々木惣一」ということにしてみただすけれども、二番煎は研究者として恥にもなりますし、何かいい知恵がないかと思つて、全集を読み直したりいたしまして、多少新しい点をつけ加えてきょうお話しするという次第でございます。どうも前置きが長くなって恐縮でございます。

河上さんと佐々木さんとはほとんど同年。佐々木さんの方が一年早く生まれました。その当時河上さんと同様に論壇において非常に有名だった吉野作造という方がおられます。この吉野作造さんも同世代で、佐々木さんと

同い年です。この三人の關係もなかなかおもしろいところがございまして、佐々木、吉野は明治の終わりのドイツ留学の間に知り合ったのですが、吉野さんが亡くなるちょうど萬川事件の年、一九三三年（昭和八年）まで、佐々木、吉野は非常にいい關係にありました。

吉野と河上は、東京帝国大学の同じころの卒業生で、大学院時代が一緒です。その当時は二人は相当仲がよかったと言つていい。少なくとも吉野さんの方は河上さんを親友だと思つていたことは事実です。ところが、非常に仲のよかつたはずの吉野、河上がだんだんおかしくなつたのが、河上さんがマルキストになつてからなんです。決定的にお二人の仲が決裂状態になつたのが、山宣——山本宣治代議士が横死されたときに吉野さんが、どうしてああいう文章を書かれたのか今でも不思議なぐらい、冷淡な文章を書かれたのです。一応山本代議士の横死を悼む形にはなつていますが、山本代議士の肩を持つ連中は山本さんを殺した七生義団に対して討論会を申し込んだ方がいいとか、あるいは山本代議士が殺されたのは、本人の不覚もあるんじゃないとか、そういう妙な文章を書かれた。それに対して河上さんは烈火のごとく怒つて、吉野さんに対する公開の抗議文を發表され

た。そういうことで決裂状態になってしまった。

しかし、先ほどから申しますように、河上先生がマルキストになり、共産党に關係されるようになってからも、最後まで佐々木、河上の友情は変わらなかったのです。

どうして友情が長続きしたのか、その理由はいろいろあるだろうと思うんですが、簡単に言ってしまうと、同じ京都で同じ学校に勤めているということはあるですね。

吉野さんは東京にいますから、地理的に遠くなれば、お互いの間も昔ほどいなくなるというようなことはよくあることです。それから、吉野さんはキリスト教なんですね。河上先生は仏教寄りでしょう。佐々木さんもこれまた仏教で、臨濟をされたことがあるんじゃないかと思うんですが、お墓は南禅寺にあります。河上さんと佐々木さんは、キリスト教でないという共通点があるでしょう。それから、趣味の共通点もございまして、河上さんも佐々木さんも、有名な繪學會という津田青楓を中心とする畫画の会のメンバーです。この掛軸をごらんになっておわかりのように、——これは佐々木さんの字の中

にはいい方だと思ふんです——河上先生の独特の名筆、ああいうさらさらとした字は佐々木さんはお書きにはならない。というより、なれない。いつも真面目な字です。

佐々木さんは実は俳句をつくっておられました、その号も笹舟という何となく女性的な俳号を持っておられるんですが、その俳句も気のきかない大真面目な俳句です。

そういうことで、随分人柄も違いますが、ともかく同じような趣味を持っておられた。それから、思想的にいえば、お二人ともかなりのナショナリストです。河上さんが第一次大戦中お書きになった「祖國を顧みて」というナショナリズム丸出しの本があるわけですが、一方佐々木さんの方も、その昔の國粹主義で有名な三宅雪嶺と並び称せられる陸羯南と同じ系統なんです。同じ自由主義といつても、吉野さんの自由主義とはちょっと系統が違います。吉野さんが決してナショナリストでないとは言えません。あの人もなかなか愛國者ですけども、吉野さんには河上、佐々木ほどのナショナリストぶりはなかったと思います。

そういう中で、先ほど申しましたように、吉野さんが山宮の死のときにどうして冷たいことを書いたかというところ、吉野さんが社会民主主義者であったという事情があると思うんですね。ご承知のごとく、戦前とくに、共産主義と社会民主主義は大変仲が悪くて、共産党の方は社会民主主義者を社会ファシストと呼んでいたわけですか

ら、吉野さんの方でもナエクソというふうに関わり合っている。でもなかったらうと推測するんです。僕は吉野さんは気の毒だ、社会ファシストの仲間入りをさせられるのは気の毒だと今でも思っているんですけども、やはり立場というのはしょうがないもので、当時の政党の関係からいえば、共産党と社民は犬と猫という関係ですから、いたしかたない。

ところが、おもしろいことに佐々木さんは社会民主主義にも行かれました。あの人は本当に変わらないう人です。初めから終わりまで自由主義者ということで一貫された。かえってそういうことの方が河上さんとの間を円滑に保つ上でよかったんだらうと僕は思うんです。佐々木さんが社民の方に行かれたら、恐らく喧嘩されたらうと思いますね。

きょう特にお話したいのは、これから申し上げる一つのこととお二人の友情の基礎にあったのではないかとことです。これは簡単にいうと、双方とも学者だったということです。こんなことは当たりまえの話ではなはだ感懐であります。河上さんがおじくになりましたときに、佐々木先生がおつくりになった詩があります。これも、佐々木流の真面目くさった詩で、その一節

にこうあります。「思へば長い交りを この最後までつづけた わけはわからぬ自分でも 学問の異なる君と僕 思想も全部は同じでない」——それからちょっと飛びまして——「真理への情熱 君を導く僕だ 思想への節操 君を敬ふ僕だ 到底及ばぬが故かな僕も 真理の道をたどりて 導いてくれたまへ河上君」。こういう真理への情熱、思想への節操をお互いに認め合っておられたのではないかと思うのです。

それがどういふところに具体的にあらわれるのかというのをきょうのお話しのミソにしたいわけです。それは端的に申せば、学問の自由、それを守るための大学の自治、この問題についてお二人の考えがいつも一致していたということです。

それは、河上さんが京大をお辞めになるときにはっきりとあらわれておりまして、皆さんご承知のことですから、ここでとやかく申すほどのことではございませんがあのとき文部省なり荒木総長なりは教授会に相談せずに河上さんの首を切ろうとしたわけですね。それを法学部の教授会——これは佐々木さんがリードしているわけですが——が横柏を入れて、経済学部の教授会が聞かれた。

その教授会の開かれている同じ建物の中で、法学部の教

授連は経済学部の教授会は河上さんを守る決議をするだろうと待ち構えていたところが、経済学部の教授会は、河上さんに対する辞職理由には承知しがたいけれども、総長が河上さんに辞職を勧告することは認めるという、わけのわからない決議をした。それがために河上さんは大学の自治のためには所属する学部の決議は尊重せねばならんという日頃の信念をつらぬいて潔くお辞めになった。

そういう河上さんのお考えは一朝一夕にできたものではなくて、実は日本の大学の歴史の中で大学の自治が問題になったときからのことであつたようです。

日露戦争が終わったときに、戸水事件が起こります。あのとき、ロシア討つべしと真っ先に叫んだ七博士、今日で申せだウルトラナショナリストの学者連中が七人おりまして、その中に戸水寛人というのがいて、これが東大の法科大学の教授なんです。ローマ法をやっていた。それが日露戦争が済むと、ご承知のように、賠償金が一文もとれず、わずか樺太の南半分しかとれなかったというので、その講和条件を不満として戸水博士が盛んに政府を攻撃する。そこで、文部省の方は後の滝川事件と同じように戸水さんを休職処分にしてしまいました。それ

に対して、東大の法学部の先生連中が怒って、戸水教授の擁護のために立ち、それから京大の法科大学でも東大と共同行動に出る。滝川事件のときには東大の法学部は知らん顔したわけですが、戸水事件のときには、京大の法科は東大の法科と一緒に闘った。

この事件のときに、河上さんはまだ東大の大学院にいて有名な『社会主義評論』をせつせとお書きになっていた。戸水事件についての論評は『社会主義評論』の書き出しのところに載っています。そこではっきりと、学者の言論の自由がなければ学問も学者も大学も存在しないと同然なんだと言っておられる。ところが、一方ではこういうことも言っておられる。学者は必ずしも節操がない、東大の教授連は、絶えず文部省とか内務省とかの局長、次官になりたがっている。だから、東大の連中がちょっとぐらい騒いでみても、それは狂犬の遠吠えに終るだろう、と皮肉っておられます。

ところが、現実には河上さんが推測したようにはならなくて、めでたく東大教授側が勝って、戸水教授も復職する。戸水さんを肖切った文部大臣の方が辞職をする大学側の全面勝利になった。ただ、問題は、戸水事件というのは、今申しましたように、ナショナリストの起こした、

つまり戦争反対で首切られたんじゃない、戦争大賛成の人が首切られたという事件ですから、顔面通に、これで学園の自由が守られたとか、大学の自治が貫徹されたとか簡単にはいえない。少し割り引いて考える必要があります。

その次に、第一次大戦が終わって起こりました森戸事件がございいます。森戸さんは、先ほど言及した大原社会問題研究所に後で関係されるわけですが、この事件が起こったときは東大の経済学部におられた。これは経済学部が法学部から独立したときに起こった事件なんです。そのときに「クロボトキンの社会思想の研究」という標題の論文を『経済学論叢』の創刊号に出されたところがこれが「朝敵義乱」に当たるといって起訴される。実はその起訴される前に、東大の経済学部は逸早く森戸さんの休職処分を認めてしまっているのです。このとき積極的に森戸弁護の劣をとられたのが、森戸さんとは全然関係のなかった佐々木さんなんです。東京まで出かけていって特別弁護人として弁護に当たられるだけではなくて、「改造」に書いたり、あるいは「法学論叢」（京大法学部の機関誌）に二回にわたって森戸弁護の論陣を張られる。これらの論文を読むと佐々木さんのその後の

大学自治論の骨格がもうできていることがわかります。今日からみしても、非常にりっぱな論旨で、私はそのうちぜひ岩波文庫に入れたいと思っております。

そこで言われていることをかいつまんで申し上げますと、当時の『大学令』の第一条に「国家思想の涵養」ということが大学の使命として掲げられているのですが、森戸さんのように「クロボトキンの社会思想」なんていうものを書く、それにそむくということになる。佐々木さんの論法は「国家思想の涵養」を大裏面目にとると、大学の自然科学系の先生は全部処分されねばならない。自然科学系では国家思想の涵養なんて一つもやっていないわけですから、自然科学者は全部大学令第一条に反するということになる。そこで佐々木さんが言うには、「国家思想の涵養」は、単に国家の具体的な命令に服従することを妨害しないこと、端的に申しますと、徴兵を拒否するとか税金を納めんとか、そういう程度に考えたらよい。ですから、無政府主義でも共産主義でも自由に大学の教壇で議論して可なり、ということになる。ですから学運事件のときでも、佐々木さんは学生側に立ちましたし、河上さんはやめる必要はないと主張したのです。ちよとこういう議論は、まさしく河上さんも当時な

まっている。これは、今度の河上全案にも載っておりま
すけれども、大阪と東京の毎日新聞にこの事件を取り上
げてお書きになっている。ただ、違ふのは、佐々木さん
は四角四面の法律論で長々とおやりになっているのに対して、
河上さんは軽妙な比喩でおやりになっている。大学教授
が真理の探求の結果、大学から追放されるのは、死刑執
行人がその職務遂行のため殺人罪で死刑になるのと同じ
であると、そういう論法で森戸処分を非難しておられる。
大学教授が自分の研究の結果、資本主義の死滅を宣言す
るマルクス主義を教授しようと、それは大学教授として
の本当の使命を遂行したのであって、ちょうどそれは死
刑執行人が死刑囚を処分するのと同じことやないか、何
が悪いんだという言い方ですね。

あのとき、東大の経済学部の教授会は、先ほど申しま
したように森戸さんが起訴される前に休職処分を承認し
ているんですね。これに対して、河上さんも非常に怒っ
ている。その経済学部のスタッフの中で、ただ一人降職
されたのが楠田民蔵さんで、それがご承知の河上さんの
弟子であるというので、河上さんも楠田さんを大変褒め
ておられるわけです。

そういうふうには河上さんと佐々木さんとは、森戸事件

について一致した態度であつたのです。

私、申し忘れましたが、その前に肝心の事件があらま
した。それは一九一三年から一四年（大正二年―三年）
にかけて、京都大学で起こつた有名な沢柳事件です。こ
のとき、河上さんはちょうどヨーロッパに留学してブリ
ュッセルにおられた。河上さんは、河田綱郎さんからの
電報でこのことを知ると、すぐ辞表を認めて京都に送ら
れるわけです。何日かして、新聞で事件が無事解決した
ということが報道され、やっと胸をなでおろして、これ
で安心してパリに行けるといって、パリで島崎藤村なん
かと一緒にいられる。京都においては、当時佐々木さん
は法学部で一番若い教授だったんですけれども、理論的
には断然教授会をリードして、沢柳事件において初めて
法律にはなりませんけれども、文部大臣の出した覚書と
いう形で、教授会の自治、つまり教官の人事権は文部省
じゃなくて、ましてや大学の総長じゃなくて、教授会が
持つんだということを文部大臣に確認させたということ
は、皆さんご承知のとおりでございます。

ですから、国内においては佐々木さんが大いに頑張ら
れ、国外においては、留学中の河上さんがすぐ辞表を書
いて送られる。つまり、京大の方で、当時の法科大学の

第で、経済学部の方では法学部から相談がなかったから知らん顔しましたというふうなことを戦後もぬけぬけとおっしゃっている。経済学部は、もとをたせば法科大学の一部であって、その法科大学が沢柳事件において大学の自治を獲得したわけだから、そういう伝統の一部は経済学部にも継承されているはずである。ですから、法学部において滝川事件が起これば、兄弟分のうちで起こった大事件ということで、助太刀に立ち上るのが仁義というものだろうと思うんですけれども、とにかく経済学部は何もされなかった。

ついでに言うと、滝川虎三さんもこの本の中で思い出を語っておられまして、経済学部の教授会がそういうだらしない有様なので、助教授の方で何とかしようと滝川さんが主唱者になって教授会に文句を言いに行こうとされた。ところが、きて当日集まったのはただ一人、つまり当の滝川さん一人だったというんですね。あとの助教授連は、いざとなるとびびってしまったのです。私の出身である文学部も見殺しにしましたから、私などもそう大きなことも実は言えないんですけれどもね。

ともかく、本当に法学部だけが孤立してしまった。佐々木さんはあのとき、河上君がいたらなあと思わ

れただろうと思います。

ついでに、滝川事件についての、私が最近得た新しい発見と言えおこがましいんですが、一つだけ披露いたしておきますと、なぜあのとき滝川幸辰という人が槍玉に上がったのか。これまでいろんな説明がありまして例えば火をつけた右翼の森田胸喜というのが昭和四年京大にやってきて、講演をやったところが、当時の学生左翼の猛者連にやじり倒された。当時の講演部長を滝川さんがおやりになっていた。ですから、滝川幸辰がやじった者を制止しなかったというのを、森田氏は大変恨んだようです。そういう個人的な恨みというものもあり、それからまた有名な滝川さんの中央大学の講演がいろいろな筋で問題になったということがあり……。ちょっと余談ですが、その問題になったというのも、確かに司法省からも問題になったんですが、おおもとは枢密院ですね。枢密院がけしからんといったのが相当大きくものを言ったようです。つまり、治安維持法に死刑を加えて改悪した田中内閣のときの司法大臣が原嘉道。あの人は弁護士出身の大臣なんですが、治安維持法大賛成の弁護士も昔はいたわけですね。そういう人が滝川事件の張本人のように私には思えるのですが、これは大した発見じゃ

なくて、本当の発見というのは、法学部がつくり上げた大学の自治をつぶすこと。それが文部省の本当の魂胆だったということです。

それは私の推測じゃなくて、当時の帝国議会の議事録を読むとはっきりとする。ところが、不思議なことに、当時の議会の議事録が新聞にはちょっとしか紹介されていない。滝川事件のときには大要新聞記者の人たちが同情的でいろいろ援助されたということは私も承知しているんですけども、これは実に不思議なことです。一番肝心の議會——昭和八年の二月から三月にかけての議會中で、赤い教授の処分問題が何回も蒸し返し出てくるのがどうして新聞報道にちゃんと載らなかったのか、僕は実に残念に思います。そういうことが早く新聞報道で出ておれば、相当抵抗できる可能性もまだあったんじゃないかという感じがする。また、そういう議会の議論が京大の法学部に果たして正確に伝わっていたのかどうかというのも疑問なんです。あのと議会議会において槍玉に上がったのは滝川さん一人じゃない。真先にやられているのが牧野英一さんで、その次に滝川さんで、それから末弘嚴太郎さんになって、最後に、これまた不思議なことなんです、その当時の東大で統計学の先生をやっていた

た有沢広巳さんがひどくやられている。つまりマルクスの『賃労働と資本』なんかをそのままテキストにしている、これは実にけしからんということまで出ている。そういうふうに四人の名前が具体的な名前としては出てこないんだけど、読めばちゃんとわかるような形で議会で堂々と非難されているのに、どうしてそういうことが新聞に出ないのか、あるいは大学でキャッチできなかったのかというのは、本当に今から思うと不思議な話なんです。ですから、滝川事件というのはかなり油断があったんじゃないかという気がしてなりません。議會では赤化教授を、大学の自治があるんで首切れないんだということをちゃんと文部大臣あるいは文部省の役人が言っているんです。ですから、赤化教授を追い出すためには大学の自治をつぶさねばならん。その大学の自治をつぶすには、大学の自治の伝統をつくり上げたのは京都大学なんです。その本家本元の京都大学の法学部をやつてしまえ。ここさえつぶせば、あとは思うままということなんです。そういうことがだんだんわかってきて、私も調べ直してよかったなと思つている次第なんです。河上さんは牢屋の中で随分心配されただろうと思いますが、しかし、結局はご承知のごとき結末になった。その

河上さんがいよいよ判決を受けられて、これから五年の刑を受けるために下獄されるときに、佐々木さんによろしくという伝言がされています。「大学をおやめになったことだけ承知しています。あなたが最も愛された京都大学もついに滅亡したかに察します」と。滝川事件を河上さんが非常に気にされていたことがわかります。また、日中戦争が本格化する直前、昭和十二年の六月に出獄されたとき、恒藤さん——滝川事件のときにお辞めになった恒藤さんに対する手紙の中でこういうことを書いておられる。「大兄が京都大学を去られたことは実に残念に存じます。過日も久々にて已に白髪となられた佐々木博士に会ひ、大兄のお碑も承ったことでした。今日のやうな京大に居残っておいでになっても致し方ありませんまいが、しかし、何にしても優秀な諸君が袖を連ねて京大を去られた事は遺憾至極です。私はご承知の通り東大を卒業したものですけれど、京大は実は私にとって実に学問上の故郷なのです。その故郷が今では廢墟に陥してしまつたやうな感じがするので、この秋は久しぶりに入浴しようと思つて見ても、何だか荒れ果てた故郷に帰るやうで嫌です」と。そうお書きになっている。それから、滝川事件から六年たった一九三九年（昭和十四年）

のことなのですが、このとき初めて末川さんから滝川事件の詳しいいきさつをお聞きになったようなんですわ。それで京都に帰られた末川さんに対して手紙がいつ、そこで、失礼ながら多少気にしていたことも事情がわかつて大いに安心し、まことに愉快に思つたということをやさわざ書いて送られている。

そういうことで、河上さんは、事件のときから事件からかなり後までずっと滝川事件のことを気にしておられたということが、今度改めて全集を読み直して非常によくわかつた次第でございます。

これは杉原先生にお伺いしてみたいと思つていたんですが、河上先生はいつからマルクス主義であつたか。私もはてどうかなと改めて思つたんですが、恐らく一九二〇年（大正九年）の森戸事件の起こつたあたり、つまり「社会問題研究」が始まつたあたりからはもうマルクス主義者と申し上げていいんじゃないかなと思つんですがマルクス主義者におなりになつてからも、常に学問の自由、あるいは大学の自治、そういう点で終始愛われなかつたということ、これをどういうふうに解するか。

最後に一つエピソードを申しますと、近衛文相が引つ張り出したんですけれども、佐々木先生が敗戦直後、こと

もあらうに内大臣御用掛として憲法の改正事業に携われたことがあります。あれはマッカーサーが言いだしたことなくですね。マッカーサーがやったらどうかと言うのを真に受けて近衛が乗り出して、佐々木さんを引っ張り出して、箱根の山に佐々木さんを缶詰にした。でき上ったときには、もう近衛は追っばられて、政府の方で独自の案を進めたということで、佐々木さんの憲法草案は日の目を見なかった。佐々木さんにとっては残念なことがあったらうと思います。

そういう天皇の顧問みたいな形で佐々木さんが乗り出されるときに、おもしろいことに河上さんが佐々木さんにならんとお祝いの手紙を出しておられるんですね。

「拝啓 承り候へば大兄には今回側近ご奉仕候御事と相成申候由」。「側近ご奉仕」とくるわけですからね。これは本当におもしろい。「御筆の御事業として憲法改正のため心血を御そそぎ遊ばされ候御事向に大兄御一生の御学問に相応しきことにて人と事との処を得たるこれに越したるものはこれなく大兄のご満足はさこそと拝察いたし候のみならず尊知の吾々においても誠に喜びに耐へずここに慎んで祝詞申上候」。本当に河上さんは我がことのように佐々木さんが側近にご奉仕遊ばされること

を評んだ文面なんですね。これなんか、考えてみると実に不思議な手紙なんですけれども、そういう不思議な手紙を書くところに河上さんの友情に厚いところが示されており、河上さんという方は、相手がどういう人であれ、その人の学問を尊重した人だということを改めて感じた次第でございます。

以上、長くなりましたけれども。(拍手)

「河上肇記念会山口懇話会」(略称「山口河上会」)

一、設立趣旨

郷土山口県の生んだ経済学者・思想家河上肇の人格と業績を研究し顕彰する事業を山口県において行うため本会を結成する。

一、本会は「河上肇記念会山口懇話会」(略称「山口河上会」と称し、河上肇記念会山口県在住会員並びに本会の趣旨に賛同するものをもって構成する。

河上肇記念会山口懇話会設立について

細 追 朝 夫

山口県在住会員の共通の念願であった「山口河上会」(略称)が十一月十七日発足することになった。

本会代表世話人である杉原四郎氏も本会報(第二十号)で、「河上にとつてもう一つの重要な場所である西南地方に何らかの組織が生れるとなおよいだろう」との期待を表明しておられる。敬慕する河上肇と郷土を同じくする私たちにとってそれはいっそう切実な願望であった。

生地岩国でかつて顕彰運動があったときが、実っていない。総じて山口において河上肇は日本近代社会思想上におけるその巨大な足跡にふさわしい位置をえているとはいひ難い。永年他郷にあつた者にとって、この事實は衝撃的ですからある。郷土の思想性、文化性が問われることもあるからである。

「河上肇が生れ、その人物を育くんだ山口県にこそ、このような組織(「東京河上会」、「河上肇記念会」)

が生れ、政治的立場をこえて、郷土の生んだ偉大な思想家の顕彰をする必要があるのではないだろうか」と訴えるべく、今夏、まず「記念会」山口県在住会員、脇英夫氏はじめ約一〇名が集い、発起人会(代表―安部一成、細追朝夫、山田龍雄、脇英夫)を結成し、「山口河上会」(仮称)設立の準備をすすめた。

十一月十七日、河上肇の山口時代に深く関わる防長教育会および吉田松陰と縁りある山口県教育会館において講演会並びに「山口河上会」設立協議の会を開催した。講師は杉原四郎氏にお願いしていたが、予定通り大門英太郎氏とともに遠路御来山いただくことができた。

「河上肇、その人と思想、――志士・文人・学者」と題する杉原氏の講演は河上肇の人間像を鮮やかに描きだし、ひとの心をとらえて離さないその魅力を聴講者の胸に焼きつけた。とくに、その志士の氣概を育くんだ山口

の歴史と環境の研究の重要性の指摘——マルクスにとつてのその故郷トリアーをあげながら——は、望郷の念にかられながらも出獄後遂に帰郷できなかった生涯のそれとともに参加者の心を強く動かしした。

続いて、岩国の地方史研究家藤重俊男氏が「祖父河上才一郎」「祖母天寿院の半生」を読んで、「と題し、今度全集に入れられたこの二篇について、それが郷土史研究上貴重な労作であることを強調、専門家の立場からのコメントを軸に講演、山口における河上研究のひとつのありかを示した。

つぎに、「山口河上会」設立協議に移り、冒頭、大門英太郎氏より「記念会」のこれまでと現況報告を受けた。続いて、発起人会でまとめた設立趣旨、略規など提案、大方の賛同をえた。このあと、若干の意見交換、懇談。散会後、「自叙伝」にも記されている葉香亭で杉原、大門両氏を囲む懇親会。全日程は成功裡に幕を閉じた。

当日の参加者は約四十名にすぎなかったが、会場は河上肇を敬慕し顕彰する会の発足にふさわしい真摯で静かな熱のこもった空気がみなぎっていた。改めて河上肇の人格に感銘を深くした会であった。

漸やく会を発足することができた。「地下の河上が欣

んでいることだろう」との杉原氏の言葉は胸にしみた。

河上の命日をめぐり、第一回の会合をもち会員それぞれが河上に寄せる想いを語りあう予定にしている。続いて、四月総会開催の予定、「花時雅盛」を想起しつつ。

最後に、会の組織上の問題について、「記念会」の御理解をえたい。

「山口河上会」（仮称）設立に当って、「記念会」との関係はどうするかがひとつの問題であった。発起人会での検討の結果、「河上肇の研究と顕彰の事業」はすでに幾多の実績ある全国的な組織たる「河上肇記念会」の一翼として行うのが適当との判断から「河上肇記念会山口懇話会」（略称「山口河上会」、二四頁別掲参照）とすることとした。

御理解がいただければ、今後、このような組織として御協力、御支援いただければ幸甚である。

（山口県厚狭郡山陽町柳庄五四〇在住）

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十二年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。



会報(回覧雑誌)

河上肇記念会 会 則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪府(または京都市)に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを弘く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開催、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認を与える。
- 六、世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。
- 七、会費は年額三、〇〇〇円とする。
- 七、この会則の改廃は総会の議決による。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。

〒五四二 大阪市南区島ノ内二〇一九

(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内

河上肇記念会



貧乏物語 初版

〒 542

大阪市南区島ノ内二〇一九(丸善石油ビル)

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二二六九六

振替口座 大阪 三三一九五

京都(きょう)に「煙」あり

1965年 創刊 只今49号

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

鬼 玉 誠 力

電話 京都 (075) 811-7646 番

振替 京都 2-15653 番

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(73~83才)が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A 5版 120頁 頒価 500円 〒 200円